

『失憶中 玩笑篇。』台湾ツアーの記録

リクウズルーム主宰・劇作家・演出家 佐々木透

交流協会では、日台交流に有意義な催しに後援名義を付与する形で協力しています。台湾でも日本のダンス・演劇等が盛んに上演されて好評を得ておりますが、ここでは、日本と台湾双方が表現の融合により生みだされた、コンテンポラリーダンスをご紹介します。言葉に依らない身体表現を使ったパフォーマンスは、日台双方のパフォーマーと観衆にもアピールするところが大きく、大成功でした。

2015年6月1日早朝。昨年に引き続き、世紀當代舞團（Century Contemporary Dance Company 以降：CCDC）との共同創作のために成田を発つ。昨年もほぼ同時期にCCDCのスタジオ（台北市）で滞在創作を行っている。機内の窓から、本年度に至るまでの経緯を少し思い出しながら、眼下に広がる雲海を眺めた。

○本公演に至る経緯

—台湾との出会い

昨年より引き続き——— というのは厳密ではなく、事の始まりは、そのさらに一年前の「アジア舞台芸術祭 2013」まで溯らなくてはならない。この芸術祭は、東京都等の主催により13年前より東京芸術劇場で開催されているもので、毎年アジアの各都市から招聘されたアーティストが、プロデューサーの宮城聡氏（SPAC—静岡県舞台芸術センター—芸術総監督）の決めたテーマを元に、短い創作期間を経て、15分の小作品を発表するというものである。私は東京のアーティストの一人として採択をいただき、CCDCのダンサー、リ・フェイウェン（李蕙雯）と共同創作の小作品を発表した。

芸術祭も終わり年が明けた頃、CCDCより連絡

が入った。内容は、「アジア舞台芸術祭 2013 で上演した、CCDC のチェン・ウェイニン（陳維寧）の小作品『イリュージョン』を、あなたの手で新しくテキストを書き下ろして欲しい。それを2014年の夏に台湾で上演したい」というものだった。最初はよく分からず戸惑いながらも、密かな胸の高鳴りを禁じ得なかった。ダンスカンパニーにテキストを書くということの知的興味は、私を大きく突き動かし、このことはその後、台湾と日本について考えていく大きな契機になった。

—2014年、初の共同創作～ダンスと演劇を、いかにコラボレーションさせるか～

こうして私は2014年6月に台北市のCCDCスタジオに滞在、チェン氏と共同演出で『イリュージョン～記憶喪失で鈍痛中のテンブル～』の創作に取り組んだ。

創作の手順は、私がテキストを書き下ろす→それをチェン氏が構成する→互いの担当パート、私なら演劇パート、チェン氏ならダンスパートの振付なり、演出を行っていく、という形である。

基本的には彼女の世界観による作品なので、彼女のイメージに寄り添いながらも、コンテンポラリーダンス特有の時間の流れが感じられにくい局面を、演劇の言葉による補助的な時間軸で、どの

ようにして打破していくか試行錯誤する。お互いが補完し合う構造にしないと、すぐさま、“それぞれのジャンルが勝手にやっている”だけの、コラボレーションでもなんでもないものになってしまう。

2014 年は、“ダンスという身体と、演劇という言葉とをどのようにして舞台上で出会わせるか”が鍵となった。最初、チェン氏は私のテキストをどんどんカットしていき、というより、そのイメージをダンスに置き換えて創作し始めた。私は「それはコンテンポラリーダンスの文脈だ」と反対した。彼女は何を言われているのかが解っていなかった。コンテンポラリーダンスの創作過程では当然、テーマとなる情報ソースをもとに、イメージを膨らませて振付へと具象させて、作品を紡いでいく。しかし、そうやって作品を作っていくと演劇とのコラボレーションにならないよ、と私は声をかけたのである。せっかく書いたからカットをするなという話では断じてなく、企画の主旨といま一度しっかり向き合おうという提案だった。

チェン氏はスマートなアーティストなので、私の言うことを真摯に理解しようと努めた。結果、書かれてあるテキスト現行のままフルで活かし、かつ、自分のフィールドであるコンテンポラリーダンスを目指した。俳優たちも踊ることにし、チェン氏が最低限納得してもらえる水準まで、何度も反復練習をした。俳優もダンサーも頭も身体もフル回転だった。解らない解らない、出来ない出来ない、を繰り返していくうちに、いつしかこのコラボレーションで大切なのは、完成されたものではなく、過程をどのように見てもらうかである、ということ、言葉が通じなくてもお互いに本能で理解していた。

『イリュージョン～記憶喪失で鈍痛中のテンブル～』の成功と、それから

私達は 8 月にこの作品を CCDC スタジオで発表、11 月には「アジア舞台芸術祭 2014」のメインプログラムの 1 つとして、東京芸術劇場シアターウエストで公演した。台北市での公演は連日満席で、急遽追加公演を実施。東京公演も、プロデューサーの宮城氏に「ダンスと演劇がこのような形で融合したのは、他に見たことがない。この芸術祭の主旨に沿った、一つの成功例ではないか」という風に変えて褒め頂いた。ダンスと演劇のコラボレーションという、初めての挑戦で確かな手ごたえを感じた。

さらに共同創作に取り組みたいと考えた私は、CCDC に再度のコラボレーションを持ちかけた。お互いのスケジュールや、理想とする会場、内容など、根気の要る擦り合わせののち、2015 年の 6 月上旬に滞在制作、中旬に台南市と桃園市で公演することが決まった。

初めての海外での滞在制作は、右も左も分からぬまま引き受けたのが、有難いことに二年越しの 2015 年まで繋がることとなったのである。

○ 2015 年『失憶中 玩笑篇。』共同創作

6 月 1 日早朝、成田から台北へ発つ。

桃園空港へ降り立ち外へ出ると、湿気を孕んだ強烈な熱気が私を出迎えてくれた。一年ぶりの亜熱帯気候との再会。ホテルからの送迎タクシーに乗り込み、ロビーで通訳と合流してのち、CCDC のスタジオへと向かった。

一年振りに訪れた場所に変わりはなかった。ダンサーたちは、私を目にするなり笑顔弾けさせた。それにつられて、こちらも笑顔を返す。直後に、マシンガンのように、英語と台湾語を浴びせてくる。ここでようやく私の身体感覚のスイッチ

が入り、頭と身体が繋がった。

CCDC 主宰のヤオ・シェーフエン（姚淑芬）さんにご挨拶をして、さっそく今回のプロダクションメンバー全員と昼食兼顔合わせ兼打ち合わせをしに、スタジオの外に繰り出すことになった。

CCDC スタジオは、MRT 中正記念堂駅と古亭駅のちょうど中間地点にある。日本のコンビニ、セブンイレブンや、ファミリーマートが目に入るたびに、またも身体が東京だと錯覚してしまう。こうして、些細なことで日本における日本の在り方、またはやり方をいい意味で裏切られつつ、自分の中の視点に変化していくのを楽しみながらいよいよ創作へと進んでいく。暑い地域でダンサーたちと話し合いをする最中のアイスコーヒーは格別だった。

ーコンテンポラリーダンスとは何か

話が前後するが、ここでコンテンポラリーダンスについて説明させて頂きたい。

台湾は、世界的に有名なコンテンポラリーダンスのチームが多く存在する。「クラウドゲート」など、別の畑である私ですら聞いたことのある有名ダンスカンパニーもあり、演劇よりコンテンポラリーダンスの方が盛んだという見方もあるようだ。このコンテンポラリーダンス、実は演劇との共通点も非常に多い。

コンテンポラリーダンスの源流は、クラシックバレエとされている。そのクラシックバレエを基調とした身体性に加えて、バレエの厳格な形式を逸脱したダンス。ゆえにダンスの定義っていうのはなんだ？ ダンスとはなにか？を原理的に可能性として考えるダンス、とを考えてみるといいかもしれない。

ダンスは一般的に言葉を扱わない。過剰な物語の説明が排除されている分、人間の身体、という原始的な視覚情報だけに絞られ、人間の存在とい

う奇跡に対し、ダイレクトに触れられる可能性を秘めているともいえる。コンテンポラリーダンスは見ていて難しい、という声をよく聞くが、意味ではなく身体を観る、という目的をはっきりさせてしまえば、鑑賞回路が、案外簡単に開くと思う。

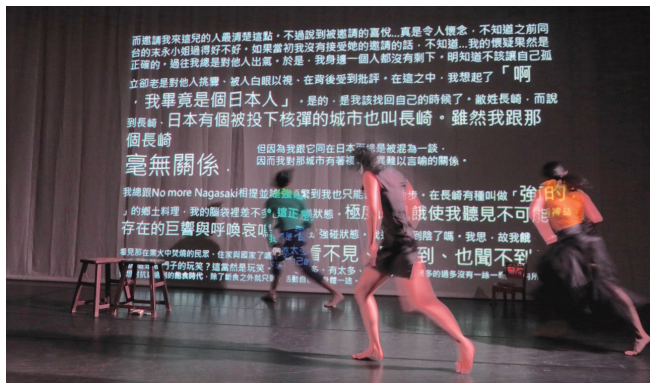
演劇では割とスタンダードとされている表現手法を、コンテンポラリーダンスでも選ばれることが少なくない。例えば、物語として語られた言葉を映像作品として別次元で作って、それを舞台上にプロジェクターで投影し、その中で踊ったりする。他にも観客を舞台上にあげてドキュメンタリー性を持たせる、古典文学作品を抽象化し作品化させるなど。通常のダンスのような、リズムに乗せて振付を踊るという形式からは凡そ外れたことが、まま行われる。コンテンポラリーダンスの歴史は浅く、演劇に比べると分野としてはかなり新しい。それを考えると、これらの手法は演劇に影響を受けたものと考えるのが自然であり、共通している部分があるのは当然なのかもしれない。そのうえで、それぞれ主体となっているのは、演劇ならば言葉であり、コンテンポラリーダンスであれば身体なのである。



リハーサルの様子



公演の様子① © CCDC



公演の様子② © CCDC

—CCDC のコンテンポラリーダンス

共同創作を行ったチェン氏が所属する CCDC は、国内外のいろいろなカンパニーとコラボレーションした作品を発表している。それは、純粋なダンスにとらわれず、できるだけ多くの手法を取り入れるためだという。

主宰のヤオ氏は「芸術は普遍性を持ったものなので、形式的なことに縛られてはいけない」と考えており、台本や演出といったことは、生活の中に基本的かつ普遍的にあるものだと考え、普段自分たちが取っている行動を作品の中に全部取り入れようという姿勢のようだ。ヤオ氏は、演劇とも多数コラボレーションしてきて、「言語を抜いて身体で表現することもまた、演劇である」と考えているようで、演劇人としては大変興味深い。

今回、私が「台湾と日本のコンテンポラリーダ

ンスは全然違うと感じている」という疑問をぶつけたところ、ヤオ氏はこのように答えてくれた。

「台湾は、東アジアの中ではコンテンポラリーダンスが盛んなんですよ。アメリカのスタイルを踏襲してアカデミックな方向に進んでいて、優秀なダンサーも多く輩出しています。日本では、私が見てきた範囲では、アメリカの思想は取り入れられてなくて、ガラパゴス的に自分のスタイルを追求しているように思います。舞踏も入っていますが、戦争を知らない世代で枝分かれしてさまざまなスタイルができていますので、戦後の精神的ダメージから出発したという当初の精神性は受け継がれていないですね。どちらかというと舞踏そのものよりも能楽などからの影響があると感じていて、ハイブリッドなものになっていると思います。」

—作品創作開始

到着した日の午後から、リハーサルを開始する。壮絶な 2014 年夏の創作過程を経て、2015 年の夏がある。お陰で今回は割とスムーズに創作が進められた。

渡台前の 5 月末にスカイプ会議を行った際、今回はチェン氏の主導で、よりダンスに重きを置いた作品作りを目指すことが決まっていた。彼女は、昨年を乗り越えたことで、テキストに対する感覚が格段に研ぎ澄まされており、彼女が構成した台本は素晴らしいものがあった。同い年でもある彼女のビジョンを、私は素直に信頼することができ、ディレクションも含めてほとんど任せた。彼女もまた、要所要所で、私に意見を求めてくれるあたり、相互の信頼関係は非常に良いものであったことは、疑いようがなかった。

ただ、今回は昨年よりも時間的な制約（滞在期間が短かった）があり、そのことは演劇人サイドとしては多大なる負荷となった。6 月 1 日～9 日



チェン氏と佐々木のアフタートーク

の稽古期間、私は日本から参加した俳優・タカハシカナコ氏と演劇のパートの調整にひたすら時間をかけた。昨年から引き受けたバトンをより遠くへと運べるよう最善を尽くす他はない。それは、演劇とコンテンポラリーダンスの未来のため、また日本と台湾の未来のためでもあった。

一作品内容

今回、私が書き下ろしたテキスト（脚本）は、チャーホフ『煙草の害悪について』を下敷きにした、昨年の作品の続編である。

あらすじ：長崎さんは、ストレスのため食べ過ぎて太ってしまう。そんな彼女を、世間は「あいつは太っている」と冷たい目で見る。人間の世の中はデタラメで、世界には戦争が絶えない。心を痛めた長崎さんは、CCDCに弟子入りしてダンスを習い、ダイエットをして着物を着こなし、日本人のアイデンティティを取り戻すことにした。

主人公が、社会での生き辛さの中でささやかな幸せを見出す姿を、コミカルなタッチで描くように努めた。劇構造を説明すると、去年は俳優三名とダンサーが三名の計六名だったのに対し、今回はテキスト上では基本的には俳優が一人で語るといふ構造のもので、それを俳優一名と、ダンサー

が三名という計四名で構成された。

一チェン氏との対話

今回は二回目ということもあり、チェン氏と作品そのものの以外の問題意識を共有する時間を持つ事が出来た。日本と台湾の歴史的背景をリサーチした私は、今回のテキストで戦争について取り上げずにはいられなかった。チェン氏は私の問題意識に反応し、演出に取り入れてくれ、以下のようにお互いの考えを共有した。

佐々木「戦争のことになると、どこかで語ってはいけないというブレーキがかかってしまうが、それぞれの国の視点というものがあるって、どれが正しいというわけではない。かといって、事なかれ主義になるのではなく、もっと違うことが表現としてできるのではないか。僕ら（1980年代前半生まれ）は制度の変化に翻弄された世代だが、いま日本全体としても、どういう方向に行ったらいいのか探っている状態だと思う」

チェン「私を含め同世代の人々が置かれている状況やそれに対する影響を考えると、どうしても戦争に行き着く。私たちの世代は、無気力だと感じている。例えば、（CCDC 主宰の）ヤオさんは私のことを信頼して下さっているが、それは見誤りだと思ってしまうほど、自分のことを無気力だと思っている。」

どちらの国も、アーティストが置かれている状況に変わりはない。自分たちが活動していく意義を、社会に問いながらやっていくしかないよね、と私達はお互い頷き合った。

○公演の様子

公演記録

2015年6月9日・10日 19:30～

於 滝莎藝術展演中心 永華館

2015年6月12日 19:30～

於 桃園市文化局 演藝廳

共同演出 陳維寧（振付）、佐々木透（脚本）

出演者 タカハシカナコ、李蕙雯、劉家瑞、
陳雅筑

芸術監督 姚淑芬

一 台南市へ

2015年6月8日、早朝。私たちは、台北駅の高
速バスターミナルにいた。それにしても、今年の
台湾は雨が少ない。

昨年は台北市のみで公演したのに対し、今年は、
台湾の台南市と桃園市の二カ所ツアーを実施し
た。台南市での会場は、洸莎藝術展演中心 永華
館である。

五時間ほどバスに揺られ、一行は台南市に到着
した。日差しが強い。台北市のそれとはまったく
違っていた。これまで見た台湾の景色とも全く
違っていた。南国色がより強くなり、都市部の洗
練された街並みは影を潜め、よりワイルドな匂い
を放った街が目の前に現れた。私の身体はすっか
り東京を脱ぎ捨てて、異国の地のリズムに鼓動が
重なっていくのを感じた。

スケジュールはタイトである。到着したその足
で、さっそく会場入りし、舞台セッティングから
明かり作り、サウンドチェックまでをすべて済ま
せ、翌日の昼にゲネプロ、夜には本番である。俗
に「乗り打ち公演」と呼ばれるものに近いスケ
ジュールだ。演劇で考えると、照明や音響を入れた
設備のある会場でやる場合、どんなに短くとも、
中一日は必要だ。しかしそこはダンスカンパ
ニー、照明、音響がしっかりできれば、あとは身
体さえあればすぐに公演ができるという小回りの
良さを十二分見せつけられた格好だ。私も普段、
劇場入りから本番までは速い方であるが、さすが
に、ここまでの規模でこのスケジュールは経験が



公演前、ホール入口にお供え物

なかった。

会場は白を基調とした木製の建物だった。柔和
な顔付きでどこことなく海の匂いを感じる雰囲気。
中は木目調で統一された空間だった。普段は、
チェロやバイオリンなどクラシック音楽の演奏会
が多いのだという。少し大きなギャラリーとして
も機能しそうな雰囲気、100名前後は十分に収
容できる大きさだった。

一通り、準備が終わり、台南初日が終わったと
思ったその時だった。突然、ハッピーバースデー
コールが起こる。忙しさですっかり忘れていた
が、6月8日は私の誕生日だった。人生で初めて
海外で歳を取った。こっそりケーキを用意してく
れていたことは、嬉しかった。みんなの気持ちが
有難かった。

一 台南公演

翌日。いよいよ、本番だ。何が不安かというと、
客層がまったくわからない。異国の地、知らない
土地、どんな人が見に来るのだろうか、そもそも、
来るのか？ そんな不安ばかりが駆け巡った。

本番前に、CCDCのカンパニーの皆さんは、
ホールの前に果物などを供え、お祈りをする。私
も線香を手に、四方へ頭を下げた。

そして、開場時間を迎える。私の不安をよそに、



みんなで集合写真

観客席はあっという間に埋まってしまった。入りきらず、立ち見客まで現れてしまった。そして、本番。観客は大盛り上がりだった。日本語、台湾語入り乱れる内容だが、観客席は皆とても集中して観劇していたし、なにより反応がビビッドだ。日本のお客さんとはまったく違う。途中、日本人俳優のタカハシが、客席に向かって、「皆さん、こんばんは！」と日本語で挨拶するクダリがあるのだが、観客は、恥じらいを見せる風でもなく、皆一様に、「コンバンワ！」挨拶を返すのである、しかも日本語で。終演後に急遽、アフタートークを実施することになった。熱気冷めやらぬその勢いで、作品に対する質問などを観客から受けた。とにかく熱心だ。その勢いは、翌日の二日目も同じであった、いや、それ以上だったとも思う。こうして、台南での公演は成功として見てよい様相であった。

二泊三日の弾丸台南ツアーは、二日目の本番を終えたと同時に、台湾高速鉄道で、その日中に台北市に戻るといって過酷さでもって終了した。「この高速鉄道は、日本の新幹線の700系車両なんですよ」という通訳の説明も上の空になるくらいの疲労感だった。

一 桃園公演

6月11日、午前9時。台北駅に集合。台湾鉄道にて、桃園駅を目指す。ここでも台南公演同様、当日会場入り、仕込み、翌日本番というスケジュールである。昨晚、深夜に帰ってきているにも関わらず、皆タフだ。

桃園市文化局 演藝廳は台南市の会場とはまったく異なる、いわゆる、公共ホールである。台南の会場の有に倍はあり、観客席も300名は入る大きさだった。まったく違う会場で行う場合、やはり入念な準備時間を考えるのが演劇なのだが、ここでもCCDCは猛烈な勢いで準備を進めていく。

準備中、私とチェン氏の間で、美意識の相違による意見の対立が起こった。会場が広くなるので、マイクを用意したいのだという。演劇人として私は真っ向から対立した。本来劇場は、そんなものをしなくても、声が聴こえるようにある程度設計されているので、できるだけそういった、視覚的にも聴力的にも邪魔になるようなことは避けたかった。結局私が一歩引いて、ではとりあえずマイクを設置してみようとなった。

すると、スピーカーから謎のノイズ音が発生し始めたのである。気になって仕方なかったが、どうも、CCDCのみんなは気にならない様子だ。タカハシ氏も、私と同じように気になるといふ。これはどういうことなのかと、悩んでいると、通訳が私の疑問にこう答えてくれた。「台湾人は潜在的に音に対して鈍感だったりする」。確かに、台湾鉄道の発車サイレンは、日本のような優しいものではなく、けたたましいベルの音で、怖いぐらいに鳴り響いていた。通訳曰く、それくらいしないと聴こえない、或いは意識されないのだという。

ここへ来て、人種の違いをこの局面で痛感するとは思ってもよらなかった。だが、時間も無いなかで、すべてを解決することは難しかった。このノイズの問題は、ギリギリまで粘ったが、原因を突

き止めるには二日から、三日はかかるということ
で断念せざるをなかった。そして翌日、桃園の本
番が粛々に行われたのである。挨拶のところはこ
こでもやはり同じように会場から日本語でレスポ
ンスが起こった。

反応は、台南同様、上々だった。

—公演を終えて

分かり合えない部分だったり、妙に理解できたりと、そういうことがあって、今回の公演が成り立っている。桃園市での公演で起こったノイズの問題は、日本と台湾の間の何か埋められない溝のようなものだったのかもしれない。けれども、私たちはそのノイズに対してどうしていけるのか、またどう関わっていくのか。新たな課題として、この公演が私たちの次なるステージへ、逞しく想像力を育てたことは間違いない。終わってみればあっという間だった。兵どもが夢のあと。終演後は早々に撤収され、ここで、本当に私たちの作品が行われていたのだろうかと思うほど、静かになっていた。

＜佐々木透・台湾での見聞録＞

文・リクウズルーム事務局

日本と台湾の観客の反応の違いを目の当たりにし、台湾の演劇事情や文化行政に興味を持った佐々木は、今回台北市文化局の Dr. シェリー・チッセ・ワン（王紀澤 以下、シェリー）氏との対談を実施した。シェリー氏は、2013 年のアジア舞台芸術祭で佐々木の作品を見て、チェン氏との共同創作を勧めて下さった、この企画になくてはならない方で、対談は大いに盛り上がった。以下、その一部をお伝えする。

（実施日：2015 年 6 月 5 日 於 CCDC スタジオ）

佐々木◆ 今日は台北文化局のシェリーさんにお話を聞いてみたいと思います。よろしくお願いします。

まず、シェリーさんはとても芸術に深い理解があると思ったのですが、どうして演劇とかが好きなのか、まずお聞きしたいです。

シェリー◆ 私は大学時代から演劇専門で、それから英国で演劇の博士号を取り、いまの仕事は台湾に戻ってきて初めての仕事。

佐々木◆ 芸術全般でもいいですが、特に台湾の演劇を客観的にどのようにお考えですか。

シェリー◆ 宮城さん（筆注：宮城聡・アジア舞台芸術祭プロデューサー）の言う“若者の演劇”のように、みんなが集まってやりたいことをやり、ただ自分のやりたいことだけを見て、外の世界……みんなが見たい理解できる演劇に関しては何も考えていないように、感覚的に感じています。

佐々木◆ 社会と演劇のあり方についてどのようにお考えでしょうか。

シェリー◆ 台湾では、芸術作品は必ず公的資金が入っていることになります。

一般的に、台湾の皆さんは芸術に関して大して関心がないし、観たところで感想の述べ方もわからない状況です。自分が子供の頃、つまり昔から、この状態が続いています。

それを変えるには、結局アーティストが大衆に対して語りかけて、作品をできる限り陽の当たるところに出してくれないと、いくら公的資金を入れても変えようがないと思っています。

しかも台湾の場合、劇場に芸術作品を観にくるのは佐々木さんと同じような世代の若者で、どうしても 35 歳以下の年齢になる。それを超えると仕事なり家庭なりで、芸術に気を配る気力がなくなってしまうんですよ。

佐々木◆ アーティストの表現したいものが、必

ずしも社会にマッチしないという問題がある。表現者はどういう考えを持てばいいか、どう関わっていけばいいかと悩む人がたくさんいるように思います。

シェリー◆ 自分の見てきた佐々木作品の場合、その辺は心配しすぎだと思っています。それほど現代的な精神構造から外れてはいないし、それに、観客に見せるような芸術家はどうしても観客を信頼しなくてはいけないので。その辺りは信心深く……信じてあげてください。

佐々木◆ 僕が去年初めて台北で創作をした時、まさに対話だと思いました。…例えばアーティストと社会、観客との対話であり、お互い分からないところから、対話を経て、少しわかるかな？という所に行けたら良いな、と思っていました。ただ、それはなかなか難しかった。

だけどシェリーさんは、アーティストをよく理解されているし、僕はようやくスタートラインに立っていると感じたので、今回ぜひお話を聞きたいと思ったのです。

シェリー◆ 去年出来上がった『イリュージョン』は、かなりのレアケースだと思います。ただコラボレーションするだけでなく、両方とも自分に対しても相手に対しても正直にならないと出来上がらないような代物で、本当に珍しいものと思って

います。

佐々木◆ ちなみに僕、日本では「戯曲のあり方を問う」ことをテーマに作品作りをしています。

シェリー◆ 台湾では文字・テキスト「のみ」を重視した演劇というのは、一時期ほとんどいませんでした。戯曲・テキストを中心にした台湾で有名な劇作家を語ると、10分かけてひとりくらいしかでてこない、そんな状況です。そのかわり有名なダンサーというか振付家、というのは結構います。

佐々木◆ 台湾で注目しているアーティストはいますか。

シェリー◆ 「シェイクスピアの妹」です。昔、自分の博士論文でも取り上げたのですが、その劇団は舞台の上で文字や音を操って表現するのが得意な劇団でした。今年4月のTIFA（筆注：台湾国際芸術節）でも、音を中心とした演劇をやったそうです。その劇団に注目していたのは、劇団が「作品がいかに関客と交流するか」に注目していたものだったからです。

佐々木◆ すみません遅くまで。本当にいろいろありがとうございました。

シェリー◆ いろいろ話せました。ありがとうございます。今度の作品も成功しますように。